島に博物館を創る

——山口県沖家室（おきかむろ）島・かむろシーサイドミュージアム開設によせて——

安井眞奈美

1　はじめに——ハワイ移民の古写真

2015年2月、山口県大島郡周防大島町沖家室島出身者や関係者からなる「かむろ会」（東京かむろ会、関西かむろ会、広島かむろ会、宇部かむろ会）の皆さんにお誘いいただき、ハワイへ向かった。沖家室は、明治時代より数多くの人々をハワイや朝鮮半島、台湾へと送り出してきた島である。沖家室の人々は現在も、ハワイに在住する移民の子孫の皆さんと交流を続けている。その一環として、「かむろ会」の皆さんがハワイへ出向くのは、今回で5度目となる。

筆者が初めて沖家室を訪れたのは、『山口県史　民俗編』の執筆委員としてフィールドワークを開始した2006年8月である。当時、沖家室では開島400年祭記念式典が盛大に執り行われていた。ハワイからも「ハワイかむろ会」の方々が祖父母の墓参りに訪れ、筆者も依頼を受けて、沖家室の集落内を歩きまわり、彼らの祖父母の家跡を探した。

『山口県史　民俗編』が2010年に刊行された後、今度は天理大学文学部考古学・民俗学専攻の学生を連れて沖家室を訪れるようになった。活動内容は後述するが、学生ともども島の皆さんにお世話になる中で、筆者は沖家室在住の大谷亮子氏より、ハワイ移民に関する資料を譲り受けるという幸運にも恵まれた。

とは言え、島の歴史を語り継ぐ貴重な資料を、筆者が個人的に所有するわけにはいかない。これらを展示し、活用していけるような資料室を開設できないかと考えるようになった。

そこで筆者は、「かむろ会」の皆さんとハワイにでかけた折、この案を参加者の皆さんに提案したところ、全員から賛同を得ることができた。さらには沖家室の泊清寺住職・新山玄雄氏が資金集めや場所探し、備品の調達などを担当してくださることになった。話は弾んで、資料室開設が半年後の2015年夏に決まり、そのことは新聞記事にもとりあげられた。場所は、沖家室の海岸沿いに建つ、大正時代の木造建物「群山荘（くんさんそう）」と決まった。

本稿の目的は、縁あって沖家室の皆さんをはじめ多くの方々とともに、「かむろシーサイドミュージアム」という島の資料室開設に協力することができた経緯を振り返り、島の歴史遺産の展示と活用について考察するものである。

2　沖家室とハワイ移民

山口県大島郡周防大島町沖家室島は、中世末には無人島であったが、1606（慶長 11）年、伊予河野氏の家臣・石﨑勘左衛門他の一団が島へ渡って島に住み始めるようになった（森本 2006: 5）。現在でも石﨑家は、沖家室島の草分けの家とされている。その後、阿波

堂ノ浦より一本釣りの漁法を取り入れたことから、沖家室島は一本釣りの漁村として発展し、また瀬戸内海航路の要所であったため、物資や人々の交流もさかんであった。

明治時代、沖家室島の人口は 3,000 人余に増え、「家室千軒」と呼ばれるほど賑わった（森本 2006: 6)。

漁業もさかんで、船団を組んで朝鮮半島、台湾、中国、ハワイ諸島まで出漁するようになった。一方、人口増加と飢饉などの被害から、1885（明治 18）年、明治政府による第 1 回ハワイ移民の斡旋が始まると、山口県からも多くの人々がハワイへ渡った。政府による移民は「官約移民」と呼ばれ、その後 26 回にわたって続き、のべ 945 万人がハワイへ渡った（土井 1980: 23)。官約移民は広島県、山口県出身者が多く、山口県の中でも沖家室を含む大島郡（周防大島）が山口県全体のほぼ 4 割を占め、最も多かった（外務省記録局 1885-1894)。

沖家室からも多くの人々が移民としてハワイへ渡った。初期の移民はコーヒーや砂糖黍畑で過酷な労働を強いられたが、そのうち沖家室の人々が得意とする漁業や商業で頭角を現す人々も現れた。たとえば 1908（明治 41）年に、沖家室から 18 歳でハワイへ渡った大谷松治郎氏はその一人である。彼はハワイへ渡って鮮魚店を始め、その後、株式会社M・大谷商会という会社を経営し、ハワイの漁業に大きな影響力を持つようになる（大谷 1971: 171-172)。彼は、他の同郷者と同様、沖家室島で寺社の改築などがあれば多額の寄付金を送り、またハワイに渡った沖家室出身者を集めて記念写真を撮り、沖家室島に送って近況を知らせるなど、移住してからも決して故郷・沖家室を忘れることがなかった。

一方、沖家室の人々も沖家室惺々会を組織し、1914（大正 3）年から 1940（昭和 15）年までの 27 年間、『かむろ』という雑誌を 158 号刊行し続け、沖家室の情報を、国内および海外に在住する出身者に伝えている。『かむろ』は、海外を含む島外出身者からの便りをもとに、彼らの近況をも紹介する双方向伝達の雑誌と言える。記事には、大谷松治郎氏をはじめハワイに渡った人々の目覚ましい活躍ぶりが紹介されている。『かむろ』のバックナンバーのうち、ハワイに関する記事をすべて抜粋した資料は、「雑誌『かむろ』に掲載されたハワイ関連記事」（安井ほか 2014）を参照されたい。

大谷松治郎氏を始めとする日本人のハワイ漁業界への躍進ぶりは目覚ましく、「1920 年代のハワイ経済において、水産業界は日本人に対する白人財閥の支配が及ばなくなっていた」（小川 2010: 49)。そして、1941 年 12 月 7 日（ハワイ時間)、大谷氏が店を拡大する盛大な祝賀会を開催しようとしたまさにその日、日本による真珠湾攻撃が始まった。大谷氏の運命は大きく代わり、その日のうちに「敵性日本人」として FBI に連行され、その後アメリカ本土のサンタフェの収容所に送られる（大谷 1971: 58-65、79-80)。まさに歴史の渦に巻き込まれてしまうのである。

筆者は冒頭で述べたとおり、沖家室在住の大谷亮子氏（大谷氏の姪）から、1930（昭和 5) 年 7 月 6 日にハワイ・ワイキキビーチで撮影された沖家室出身者の盛大なピクニック、また 1931 年 5 月 10 日に撮影されたと推測される大谷松治郎氏の厄払いの祝宴の写真をい

ただいた。写真の詳細については別稿に譲るが（安井 2014）、それらの記念撮影は、沖家室出身のハワイ在住者と故郷・沖家室を結ぶ証として、また大谷松治郎氏の活躍ぶりを示す記録として、いずれも彼が企画したものであった。

3　第5回かむろ会ハワイツアーへの参加

2015年2月、第5回「かむろ会ハワイツアー」と銘打った総勢14 人のツアーに筆者も参加し、ハワイへと向かった。第1回目の「かむろ会ハワイツアー」は1985年、明治政府が斡旋したハワイ官約移民開始百年記念として開催された。以来、30年間の交流が続き、ツアーは今回で5度目を数える。

今回のハワイ渡航の主たる目的は、旗揚げ者の一人である泊清寺住職の新山玄雄氏によると、ハワイと沖家室の友好を示す調印書をハワイ在住の沖家室関係者の方々に渡すこと、またホノルルにてハワイかむろ会を牽引されてきた日系2世の青木孝己氏が2008年にご逝去された後、途絶えていたハワイかむろ会の再結成を目指すことである。その拠点として、ハワイ島、マウイ島、オアフ島各地の浄土寺院を訪れて新山氏が法要を営み、ハワイ在住の沖家室や周防大島、山口県ゆかりの多くの人々にお目にかかることとなった。以下、ハワイでの主な訪問先と概要を示す。

＊2015年2月22日　ハワイ島　ヒロ（Hilo）

沖家室出身の松野亀蔵氏が北川磯次郎氏とともに1907年に設立したヒロ水産株式会社（Hilo Suisan Company）、現在のSUISANを訪ねた（写真1）。

写真1　沖家室出身者創設、ハワイ島ヒロの水産会社

残念ながら松野氏の御子息にはお目にかかれなかったが、会社には水揚げされた魚が次々と運びこまれていた。

次に訪ねたヒロの浄土宗寺院・明照院は、泊清寺住職・新山玄雄氏の祖父の弟子にあた

る原哲雄氏が開基した寺であり、泊清寺ともとりわけ縁が深い。明照院は当初、「ヒロ新町」と呼ばれた古い町並みの一角に創建されたが、1960年の津波で被害を受けたため現在の場所に移転、1964年に本堂が建てられた。地元の方々がご馳走やお土産を用意して歓迎してくださり、両親や祖父母が周防大島や沖家室の出身という日系2世、3世の皆さんと、和やかな雰囲気の中、話が弾んだ。

また、かむろ会を代表して泊清寺の新山住職が、調印書を明照院住職に手渡された。その一部を以下に抜粋したい。「かつて私達のふるさと、沖家室から多くの人々が太平洋の波涛を越えて、このハワイに渡ってきました。私達の先人の皆様はこの地で多くの苦難に遭いながら、それを克服し、今日を築かれました。そしてハワイの振興に力を尽くされ、日米の交流に大きな役割を果たされました。そしてふるさと沖家室へも大きな愛情を注いでいただきました。第二次大戦後の物資の欠乏していた苦しい時のハワイからのご援助を私達は今も忘れてはいません。ハワイに先人の皆様が渡って130年、長い月日が流れましたが、皆様と古里に残った私達の友情は途切れることなく続いてまいりました。」

この調印書によって、「ふるさと」沖家室を拠点にした人々のさらなる交流が約束された。

＊2015年2月23日　マウイ島　ラハイナ（Lahaina）

マウイ島ラハイナ周辺の海域には、この時期、多くの鯨が繁殖に訪れる。そのため、鯨ウォッチングが観光の目玉となっている。その近くのラハイナ浄土院には、明治時代開始100年（1968年）を記念した「移民百年之鐘」が建てられている（写真2）。ここでは住職の原氏ほか、沖家室出身の北川マリオ氏、お寺に毎週来られる皆さんが出迎えてくれた。原住職は、ハワイでの日本の仏教寺院の創設は、「1895（明治28）年に大島郡東屋代村西連寺住職・岡部学応師が来布し、幾多の苦難を経てハマクア地方5耕地の日系同胞の支援のもと「日本人総菩提所」として「ハマクア仏教会堂」を建立した（日本仏教のハワイ最初の公式寺院）」と説明された。その後、仏教各宗の160余ヶ寺がハワイ全島にわたって創設されたが、現存するのは80ヶ寺余りだという。

写真2　マウイ島ラハイナ浄土院　移民百年の鐘

その後原住職は、移民1世の人々が砂糖黍畑での辛い労働の中で歌い継いだ「ホレホレ節」を紹介された。そして、「ハワイに渡ってこんなに苦労しても、子どもだけはもっと幸せに暮らしてほしい、という思いがあり、その心の支えとなったのが、皆のおかげ、故郷のおかげ、ご先祖のおかげという思いではなかったか。故郷の心の絆を結ぶためには、苦しみだけでは生きていけないし、どこかに喜びも必要だ」と、故郷の重要性を説明された。浄土院での法要の後は、ビーチにて昼食会となり、ハワイでの暮らしや沖家室の話に花が咲いた。

ラハイナ浄土院の向かいの敷地には、マウイ郡の共同墓地があり、広島県や山口県出身の移民一世の人々の墓とおぼしき、1919（大正8年）を刻んだものが多く見られた。

＊2015年2月24日　オアフ島　ホノルル　ハワイ別院

2008年にハワイかむろ会を長年にわたって盛り立てて来られた青木孝己氏が逝去され、しばらく会の活動が途絶えていた。そこで今回、新山住職はハワイ別院で、ぜひともハワイかむろ会の再発足を実現させたいと考えていた。会場では、沖家室や周防大島にゆかりのハワイ移民2世、3世そして4世の皆さんが自作の家系図を見せながら、皆と話が盛り上がった（写真3）。そのような中、新しいハワイかむろ会会長は、沖家室島出身者の祖父を持つ3世の大谷佐奈江マリー氏に決まり、皆の承認のもと新たな交流が開始されることとなった。

筆者は、沖家室の人々が、1930年にワイキキビーチで記念撮影をしていたこと、そしてこの写真をもとに沖家室とハワイの交流がより一層深まるよう尽力したいと皆に伝えた。

翌日、新山住職がパールハーバーにある青木家の墓参りをされた。

写真3　ハワイ別院（ホノルル）にて　家系図をみながら交流

＊2015年2月25日　オアフ島　ホノルル　ハワイ大学

かむろ会の皆さんが帰国された後、筆者は大谷松治郎氏の次男・明氏を、朝日新聞の小川裕介記者とともに訪ねた。94歳の大谷明さんはハワイの水産会社を継ぎ、現在会長職に

就いている。折しもこの日は、VVV 表彰式がハワイ大学で開催され、明氏が受賞されたので筆者も参列させていただいた。VVV とは Varsity Victory Volunteers の略で、1941 年 12 月 7 日の日本による真珠湾攻撃後、武器を持たずに祖国アメリカのためにさまざまな労働奉仕を行った、当時ハワイ大学生であった 167 人の日系 2 世のグループのことである。その後、明氏は欧州戦線に出兵するが、その時のことを松治郎氏は自伝で「父は敵性日本人の名の下に抑留され、息子は、米国軍人として戦地に出征する。こんな矛盾した皮肉なことがあろうか。だが各所に沢山あった。これも戦争が生んだ悲劇の一つと言えよう」と記している（大谷 1971: 81)。その VVV のメンバーが、2015 年 2 月に表彰されたのである。

その後、明氏に 1930 年に撮影されたワイキキビーチでのピクニックの写真を見てもらうと、一人ひとりじっくりと確認し、「ここに写っているのは私と兄だ」とおっしゃった。貴重な証言であった。

4　山口県での天理大学考古学・民俗学研究室、民俗学実習の実施

次に、2010 年より天理大学考古学・民俗学研究室が行ってきた山口県での民俗学実習の概要を示したい。その間、中国新聞や朝日新聞などにも民俗学実習の様子が紹介され、地元の方々との交流の機会も増えた。以下のような経緯を経て、2015 年はいよいよ沖家室島に資料室を開設するという具体的な目標に向けて、民俗学実習においても準備を始めることとなった。将来、学芸員や文化財行政の仕事、地域おこしなどのさまざまな仕事を目指す天理大学の学生たちにとっても、またとない学びの機会となった。

山口県での天理大学考古学・民俗学研究室の民俗学実習（2010 年～2015 年）

2010 年 7 月　山口県大島郡周防大島町沖家室の町並み調査と聞き取り実施
2011 年 3 月　沖家室にて補足調査
2011 年 9 月　沖家室の町並み調査・「沖家室探訪マップ」の作成
2012 年 2 月　安井（他、天理大学教授 2 名)、滝部にて民俗学実習の打ち合わせ
2012 年 8 月　山口県下関市立豊北歴史民俗資料館にて民具整理
2013 年 8 月　沖家室島にて「ハワイ移民」に関する聞き取り実施
　8 月 31 日　郷土大学「ハワイ移民フォーラム」参加発表
　9 月 6-8 日　安井、沖家室にて大谷亮子氏より古写真、旅行鞄を受領。
　10 月 30 日　高石ともや氏の「大往生の島コンサート＆佐野眞一氏トーク」にて、安井がハワイ移民の古写真を紹介する。
2014 年 6 月　安井、下関市・山口市にて民俗学実習の打ち合わせ
2014 年 8 月　山口県下関市豊北歴史民俗資料館にて民具整理の実施
2015 年 1 月　安井、山口市にて民俗学実習の打ち合わせ
　2 月　安井、かむろ会の皆さんと第 5 回かむろハワイツアーに参加
　ハワイかむろ会再発足、「移民資料の展示室」開設にむけて準備

3月　安井、沖家室島訪問、展示室開設の打ち合わせ

8月　山口県下関市豊北歴史民俗資料館にて民具整理の実施、その後、かむろシーサイドミュージアム開設準備およびオープン記念式典参加、発表

5　かむろシーサイドミュージアムオープン記念セレモニー

資料室は、泊清寺の新山住職により「かむろシーサイドミュージアム」と名付けられた。この名称には、沖家室の人々がつねに海外を視野に入れ、海を渡って生活の基盤を求めてきた「海洋民」としてのアイデンティティが込められているのだという。沖家室からは、明治時代から多くの漁師が対馬や朝鮮半島、またハワイなどへ出漁し、さらにビジネスの才覚を活かして多くの人々が海外へ移住してきた。近年では、ハワイの伝統航海士であるナイノア・トンプソン氏のホクレア号が周防大島にも寄港し、トンプソン氏は沖家室を訪れて「かむろ針」の製作の様子を見学している。こうした交流の実績なども踏まえて「かむろシーサイドミュージアム」という名称が浮かびあがってきたのだろう。

2015年8月7日、私たちは天理大学考古学・民俗学研究室の民俗学実習の一環として総勢21人で沖家室を訪れた。翌8月8日午前中、資料室となる群山荘にて資料やパネルを設置し、旅行鞄やトランクを水拭きし、開室の準備にあたった。

8月8日午後より、「かむろシーサイドミュージアム」オープン記念セレモニーが始まった。まず周防大島町長、教育長、沖家室自治会長、東京かむろ会、関西かむろ会、広島かむろ会、宇部かむろ会などの皆さんから挨拶があり、その後の研究発表会では、小川真和子氏（立命館大学文学部准教授）、岡野宣勝（中央大学・跡見学園女子大学兼任講師）が沖家室とハワイ、移民の関係について発表され、続いて筆者が「ワイキキビーチでのピクニック――昭和初期のハワイかむろ会」と題して沖家室のハワイ移民の人々の活躍、戦後の交流の在り方などを発表した（写真4）。

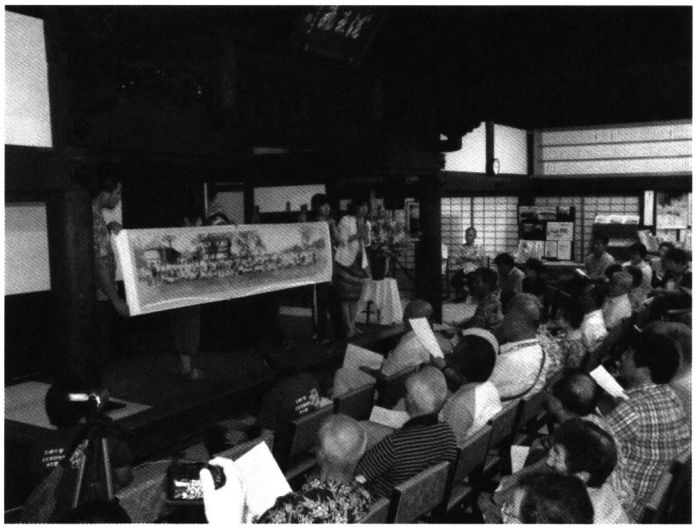

写真4　かむろシーサイドミュージアム記念セレモニーでの発表

さらに、展示に関わった天理大学の学生数人が、今回のミュージアム開設に関する感想を発表した。最後に山口県出身のシンガーソングライター・ちひろさんが、「沖家室　ふるさと―わたしの島」（作詞 矢崎節夫、作曲 ちひろ）を熱唱され、かむろシーサイドミュージアム開設にふさわしいコンサートで幕を閉じた。

6　かむろシーサイドミュージアムの主な展示

以下、かむろシーサイドミュージアムの概要を示す。

＊名称　かむろシーサイドミュージアム

＊場所　山口県大島郡周防大島町沖家室島、群山荘

＊開館　2015 年 8 月 8 日（土）　かむろシーサイドミュージアムオープン記念式典後

＊展示方法　1908（明治 41）年ハワイに渡り、漁業で成功した沖家室出身の大谷松治郎氏ゆかりの古写真、トランク、旅行鞄、コート、エプロンなどを展示。いずれも筆者が、沖家室在住の大谷亮子氏より譲り受けたものである。天理大学考古学・民俗学専攻の学生とともに写真パネル、解説パネルを作成、展示は筆者の他、天理大学考古学・民俗学専攻の飯島吉晴教授、齊藤純教授、卒業生の柿本雅美氏（仏教大学宗教ミュージアムで学芸員の仕事に従事）が中心となり、学生に指導しながら行った。

＊主な資料

①1930 年、1931 年にハワイ・ワイキキで撮影された写真 3 点（写真 5）

写真 5　古写真、拡大写真（上部）の展示

特注の木製額縁に収められた写真3点は、安井がいったん天理大学に持ち帰り、業者に委託して埃や塵を払ってクリーニング作業を行ってからデジタル化した。デジタルデータをもとに実物大にプリントアウトしたものを、再び特注の木製額縁に収めて展示している。写真の原版については、保存用の箱に入れて保存している。

②ハワイ・ワイキキビーチでの写真（拡大写真）（写真5）

天理大学にて、写真を拡大してプリントアウトしたものを展示（写真5）。1930年初頭当時の優れた写真技術とパノラマ型カメラの性能により、172人一人ひとりの顔が鮮明に写っている。この写真を見て、もしかしたら大谷明氏のように、「私と兄だ」と名乗り出てもらえるよう期待を込めて、拡大展示を行った。加えて、昭和初期にハワイ・ホノルルでピクニックを楽しんだ、さまざまな年齢層の沖家室の人々をじっくり見ていただきたい。

③トランク（大1点）　縦54㎝・横92.5㎝・高さ59㎝（写真6　下）

ハワイから大谷松治郎氏が持ち帰ったもの。大谷家に長らく置かれていた。使用年代は不明。ハワイ移民資料館および久賀民俗資料館にも同様のトランクが展示されている。トランクに貼られたステッカーには、「N.Y.K.Line 2 STATE ROOM」との楕円形のステッカーの中に、「Mr.U.Otani」そして「DESTINATION Yokohama」、さらに「Chichilu MARU」とある。大谷亮子氏の話では、このトランクは大谷松治郎氏が持ち帰ったものだが、イニシャルは「Mr.U.Otani」と記されている。

④旅行鞄（小2点）

旅行鞄 ①縦33㎝・横65㎝・高さ19㎝　旅行鞄 ②縦33㎝・横68㎝・高さ17㎝

トランクと同様、ハワイから大谷松治郎氏が持ち帰ったもの。鞄に貼られたステッカーには「Hotel Hosenkaku Kanda Tokyo」「横濱市　松阪屋旅館」など日本のホテルのものも貼られている。船で横浜に到着後、沖家室に帰宅したとの大谷亮子氏の談話。

⑤ジャケットとベスト（写真6　中央上）

「大谷」と内ポケットに刺繍の入ったジャケットとベスト。大谷松治郎氏のものか。

⑥リバーシブルのコート（女性用）（写真6　右）

トランクに入っていたコート。表は黒、リバーシブルの裏は、白地に大輪の花模様が美しい。天理大学にて1か月燻蒸したのち展示した。

⑦大谷商会のロゴ入りのエプロン（写真6　左）

コートと同様、トランクに入っていた、大谷商会ロゴ入りエプロン。1931年5月10日、大谷松治郎氏の厄払祝宴記念写真に写る、ホノルル日本人料理人組合員のエプロンにも、手書きで、漢字の「大」に「M.Otani」と記されている。昭和初期からのロゴマークとわかる。

写真6　トランク、ジャケット、コート、エプロンの展示

7　おわりに――かむろシーサイドミュージアムのこれから

沖家室に資料室を作りたいという筆者の希望が、群山荘の「かむろシーサイドミュージアム」という立派な形で実現されたことは、たいへん喜ばしいことである。沖家室の泊清寺住職・新山玄雄氏、大谷亮子氏をはじめ、群山荘をご提供くださった柳原孝志氏、沖家室および周防大島の皆さん、また全国のかむろ会の皆さんに心より感謝を申し上げる。いくら「資料室を創りたい」と言ったところで、地元の皆さんの協力なしには決して実現しないからである。それが、このような短期間で開設にまで辿り着けたことは、まさしく皆さんのご協力とご理解があってのことである。

新山住職は、かむろシーサイドミュージアムの今後について、ハワイ移民に関する資料だけでなく、朝鮮半島、台湾など沖家室の人々が移住した他の地域に関する資料も収集していきたいという。また、周防大島の日本ハワイ移民資料館、周防大島文化交流センター、

オアフ島のハワイ日本文化センターなどとの連携も考えられるだろう。これらの資料収集と、さらには当時の生活に関する聞き取りを進めることによって、国内外に生活の拠点を移しつつも、故郷とつながりを持ち続けた沖家室の人々が、どのように近代に直面したのかを論じることもできる。

最後に、今回の湯川洋司教授追悼記念号に寄稿させていただいた中で、御生前、湯川先生が筆者に、山口大学と天理大学の学生たちと一緒に沖家室で何かお手伝いできればすばらしいですね、とおっしゃっていたことを思い出した。山口大学の学生たちは沖家室で「春のお接待」を長年手伝ってこられたと伺った。すでに多くの大学生たちが沖家室を訪れ、沖家室で学ぶ機会を与えてもらっている。今後、かむろシーサイドミュージアムを拠点に、若い人々にも加わってもらい、さまざまな活動が期待できそうだ。筆者も引き続き、展示の充実に向けてお手伝いができれば光栄である。

［文献］

大谷松治郎, 1971,『わが人となりし足跡――八〇年の回顧』文洋社.

小川真和子, 2010,「ハワイにおける日本人の水産業開拓史――1900 年から 1920 年代までを中心に」『立命館言語文化研究』21-4.

OGAWA, Manako, 2015, *"Sea of Opportunity; The Japanese Pioneers of the Fishing Industry in Hawai'i"*, University of Hawai'i Press; Honolulu.

小川裕介, 2015,「祖先の故郷　絆再び――ハワイ移民の子孫　山口の離島島民ら」『朝日新聞』2015 年 2 月 27 日記事.

――――, 2015,「沖家室とハワイ（下）――移民の歴史　未来の力に　島に展示室　活性化願う」『朝日新聞』2015 年 3 月 19 日記事.

外務省記録局, 1885-1894,『日本人民布哇国へ出稼一件　出稼人名簿之部』（外務省記録 3,8,2,5-14 外務省外交史料館蔵）.

周防大島町, 1959,『周防大島町誌』周防大島町.

天理大学考古学・民俗学研究室民俗学実習班, 2011,「山口県周防大島町沖家室の町並み調査および奈良県奈良市・天理市の秋祭り見学」『古事』15.

――――, 2012,「山口県周防大島町沖家室島『沖家室探訪マップ』作成にあたって」『古事』16.

――――, 2013,「山口県下関市豊北歴史民俗資料館の民具整理」『古事』17.

土井彌太郎, 1980,『山口県大島郡　ハワイ移民史』マツノ書店.

堀雅昭, 2007,『ハワイに渡った海賊たち――周防大島の移民史』弦書房.

宮本常一・岡本定, 1982,『東和町誌』東和町.

森本孝, 2006（1983),「沖家室という島」沖家室開島 400 年記念事業実行委員会編『沖家室　瀬戸内海の釣漁の島――あるくみるきく 195［復刻］』みずのわ出版.

安井眞奈美, 2010,「故郷の民俗」『山口県史　民俗編』山口県.

――――, 2012,「民俗学実習（天理大学考古学・民俗学研究室）の 20 年を振り返って」『古事』16.

――――, 2013,「モノから暮らしを見つめ直す――大学教育における民俗学実習の現状と課題」『比較日本文化研究』16.

――――, 2014,「ワイキキでの同郷会記念写真――山口県沖家室島のハワイ移民関連資料」『日本研究』50.

安井眞奈美・飯島吉晴・齊藤純・2013 年度民俗学実習班, 2014,「雑誌『かむろ』に掲載されたハワイ関連記事」『古事』18.

所属：天理大学文学部教授
E-mail アドレス：m-yasui@sta.tenri-u.ac.jp